

答えはすべて解答らんに入れなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

著作権上の都合により未掲載

問一 ―― アゝエのカタカナを正しい漢字に直しなさい。

問二 ―― 1について、なぜ「この集まり」が「母国に向けて開かれた、心ばかりの窓」となるのですか、分かりやすく説明しなさい。

問三 ―― 2について、

- (1)「習わぬ経を読む」とはここではどういうことですか、具体的に説明しなさい。
(2)なぜ――2のようになったのでしょうか。

問四 空らんには、「私」がダリオの日本語のあやまりを直した言葉が入ります。前後をよく読み、どのような内容か考えて答えなさい。

問五 ―― 3について、「私」はどのような気持ちでこのように述べたのでしょうか。分かりやすく答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある日、バイオリンのレッスンをさぼって街を歩いていた「ぼく」は、人混みの中に人間と同じ大きさの本物のうさぎを見つけた。うさぎは「ぼく」と目が合ったことがうれしくて、「ぼく」のところにやって来る。不思議なうさぎにつきまとわれるようになった「ぼく」は、そのうさぎに正体をたずねた。

◇◇

「ぼく、ほんとうは王子さまなんだ。でも、悪い魔法使いのおじいさんに魔法をかけられて……」
「おばあさんじゃないの？」

「どっちだっていいだろ。とにかく、魔法をかけられてうさぎにされてしまった。そして、違う時間のなか、違う場所にほうりだされた」

「そんな、おとぎ話みたいなこと……」

「しかも、ぼくはなにも覚えていない。自分が誰だったのか、どんな名前で、どこから来たのか」

「まさか……」

ぼくは、ちよつと考えてからいった。

「でも、なにも覚えていないなら、どうして魔法をかけられた王子さまだってわかるの？」

うさぎはうつむいたまま、上目づかいでぼくを見て、にやつとした。

「坊や、いいところに気がついたね」

そして、顔をあげるとけろりというんだ。

「いまの話は、まっ赤な嘘」

「なんだって」

ぼくは、ちよつと腹を立てた。うさぎのやつ、なんでも聞いてくれるなんていつて、はぐらかしてばかりじゃないか。

「話したくないんなら、はつきりそういつてよ」

「ごめん。そういうわけじゃないんだ。ちゃんと、話すよ。ちゃんと聞いてくれる？」

「うん」

「ちゃんと聞かれたのはじめてだし、話すのはじめてなんだ。いままで、みんな変なふうに目をそらすだけで、面と向かって聞くやつなんか、いなかったからね。だから、ぼく、どうやって話したらいいのか、よくわかんないんだよ。でも、ともかく、やってみるから」

そして、うさぎは身の上話をはじめた。それは、至極短いものだった。

「つまり、こういうことさ。気がついたら、この街にいた。こんな格好で。なにも覚えていない。空にはまんまるい月が出ていた。それだけ」

「それだけ？」

「うん」

「いつ、ここにいつて気がついたの？」

「この前、月がまんまるかった夜」

「じゃあ、たったひと月前？」

「そう。まるで、いきなりここに生まれたみたいなんだ。わからないことがたくさんある。それなのに、いろんなことを知っている。ずっと生きてきたみたいだね。どういうことだか、さっぱりわからない。ぼくは、いままでもどこかにいて、名前のあるぼくだったのかもしれない。つまり、忘れてしまったってことかもしれない。自分のことを」

「まさか……記憶喪失？」

「たぶん、ね」

記憶喪失のうさぎ……。ぼくは頭がぐらぐらしてきた。等身大のうさぎってだけで、わけがわからないのに、記憶喪失だなんてもつとわけがわからない。うさぎがでたらめをいうのも無理もないな。『魔法使いにうさぎにされた王子さま』ってことよりほかに、どんな合理的な説明があるだろう？ ま、その説明だって、ちつとも合理的じゃないけどさ。

なんていつたらいいのかわからなくなって、ぼくはため息をついて海を見た。相変わらず風は強くて、海は小さな白い波を立てている。

「警察……とか、いつてみたらどうだろう？」

ふと思いついてそういいながら、ぼくはもうそんなことを口にしたことを後悔していた。

「だめに決っているよね。そうだよ。人間の記憶喪失なら調べてもらえるけど……」

「よりによつて『うさぎ』じゃあね」

「ごめん。ぼく、そんなつもりでいつたんじゃ……」

「いいんだ。うさぎだってことも、確かじゃないけどさ、とりあえず誰が見たって、ぼくはうさぎなんだから」

頭のなかでいろんな考えが渦巻いていた。病院へいつたらどうだろう？ 記憶喪失が直るかもしれない。でも、それより前にうさぎだつてことが問題になるだろう。そうしたら、どうなるんだろう？ 捕まって検査とかされるんだろうか。そんなのひどいよな。うさぎがうさぎだつてことは、べつに病氣じゃないのに。それとも、動物園に送られる？ まさか。もしかしたら、相手にされないんだろうか。見て見ぬふりをされるんだろうか？ そうかもしれない、いや、そうじゃなくて、これは国家機密かなんかになって、それを知っているぼくは監

禁されて……。

「ところできみ、名前は？」

「えっ」

「なんて呼んだらいいのかな、きみのこと」

「あ、ぼく、ユーリ。ユーリって呼んでよ。きみのことは、なんて呼ぼう」

『『うさぎ』でいいよ』

「名前は、いらないの？」

「どうして名前なんかいるの？」

『うさぎ』って呼んで、ぼく以外のうさが返事をすると思う？」

ぼくは、首を横に振った。

「ぼく、なんにもいらなんだ。例え名前だって、持たなくてもすむものは、いらない。家だっていらないし、記憶だとか、過去だとか、そんなものだって、なくたっていいって思っているのさ。実際、ないんだけどさ。だからって、やせ我慢してるわけじゃないんだ。これはこれで、さっぱりしていて気持ちがいいよ。いくところもないし、帰るところもない。でも、どこへでも好きなところへいけて、好きなところへ帰れる。ぼくは、誰のものでもない。ぼくは、ぼくのものなんだから」

ぼくは、びっくりしてうさぎの顔を見た。こんなふうにいるのはおかしいかもしれないけれど、その時のうさぎの顔は、すごくきれいだった。夕陽がうさぎの顔を照らして毛の尖がきらきらと光り、うさぎは遠くを見ていた。どこか、すごく、すごく遠くを。薄紫に煙る半島に太陽が沈もうとしていた。その反対の海から、月が顔を出そうとしていた。

「でもね、目をつむると、聴こえるものがあるんだ」

うさぎは、そういうながらそつと目を閉じた。

「なにが聴こえるの？」

「白い砂、赤い砂、黄色い空、青い空」

「空が、聴こえる？」

「うん」

砂浜や空をめぐる風の音が聴こえるのだろうか、とぼくは思った。その時、ぼくはまだ、うさぎがそんなふうに物をいうってことに慣れていなかったんだ。

「もしかしたらぼく、いつか、なにかを思いだすかもしれない。なにか、なつかしいものにでも出会ったら」

……（中略）……

うさぎとはじめて会った次の日、ぼくたちは半島の海へいった。

でも、ぼくはその前の晩から、妙に落ち着かない気分だったんだ。はじめは、どうしてだかわからなかった。もちろん、街でいきなりあるなやつに会ったんだから、落ち着かなくて当然だろう。でも、そういうことじゃない。むしろ、ぼくは、うさぎのことをすんなりと受け入れていた。そのことが、かえってぼくを落ち着かなくさせていたんだ。あんな不思議な、この世にありえないはずのものを、ぼくはもう信じている。うさぎはすでに、ぼくのなかにちゃんといた。まるで幼なじみみたいに、動かしようもなく。うさぎの、あのふわふわとした毛の感触や、透きとおった赤いビー玉みたいな目玉、ひくつく鼻や震えるひげ……。それにあの、つんとした獣の匂い。そんなもののすべてが、確かにそこにあるって、ぼくには実感できた。

ぼくは、ママに「新しい楽譜をかうから」って嘘をついて、うさぎと海へいくためのおこづかいをもらった。ママの理想の少年を演じていれば、ママはいつだって機嫌よくぼくにおこづかいをくれる。まんまとおこづかいをせしめながら、なんか変だなって、ぼくは、内心思

っていた。だって、そうじゃないか。うさぎは本物のうさぎだ。なかに人がはいっているような偽物じゃないし、うさぎのふりをしているわけでもない。それなのにぼくときたら、ここで上手に『ぼく』のふりをしているんだから。ぼくは『ぼく』というぬいぐるみをかぶっている。そうやって、ずうつとママやパパとうまいことやってきたんだ。ぼくは、なんだか自分が卑怯者のように思えてきた。ぼくは、嘘つきかもしれない。自分のことを王子さまだなんて途方もない嘘をつくうさぎよりも、ずつとひどい嘘つきかもしれない……。

早くうさぎに会いたかった。会って、うさぎを見て、触って、うさぎがうさぎだっていうことを感じたかった。うさぎといっしょに、波の音を聴きたかった。そうしたら、ぼくは、本物のぼくでいられるような気がした。

……（中略）……

そして、ぼくたちは出発したんだ。昇ったばかりの朝日が、ビルの壁をピンクに染めていた。がらんとした人氣のない舗道を、駅へと向かう。そんな時間に街を歩くことはめつたになかったから、不思議な気分だった。どこか、外国の知らない街角を歩いているみたいだった。そして、とてつもなく遠くへいくような……。

もちろん、ぼくたちが向かったのは、シリアの砂漠でもないし、ノルマンディーの海でもなかった。きのう夕日が沈んでいたあの半島だ。夏になるといつも泳ぎにいく海岸に、ぼくはうさぎを連れていこうと思っていた。たいして遠くはない。電車で一時間ちよつとで着いてしまう。でもそこは、ぼくにとつては特別の場所だった。なにもかも違うんだ。空も、海も、緑も、光も。

うさぎは上機嫌だった。小さな子どもみたいに、走りだした電車の窓からずつと外を見ている。

「ねえ、うさぎ。ドーナツ食べようよ。あつたかいうちに」

そういうと、うさぎはやつとこつちを向いた。ぼくたちは、ボックス席に向かいあつて、朝食がわりのドーナツを食べた。お店で出てくるあつあつのドーナツにはかなわなかったけれど、それでもそれは、すごくおいしかった。昨日は気がつかなかったけれど、こうやって正面から見ていると、うさぎはひげにお砂糖をつけて、ぼろぼろこぼしながら食べていた。しょうがないやつだなってぼくはあきれ、食べおわると、うさぎを立たせて、ハンカチで毛皮にこぼれたお砂糖を払ってやった。

「くすぐったいよ」なんていいながら、うさぎは、やけにうれしそうだった。

ぼくたちは、かなりはしゃいで騒がしくしていたのに、誰もぼくたちを見ないのが不思議だった。釣りの道具を持ったおじさんも、きのう電車に乗りそびれていま帰るって感じの髪の長い男の人も、みんなうさぎをちらつと見ては、そんなもの見なかった、とでもいうように目をそらす。街の人とおんなじだ。うさぎは透明なんだ。そして、いっしょにいるぼくも。ぼくには、だんだんわかってきた。うさぎとなかよくするっていうのは、そういうことなんだって。ぼくも、透明になるってことだって。でもぼくは、そんなこと全然構わない。

やがて電車は、あの駅へついた。古めかしい木造の待合室から一歩外へ出ると、いきなり光がまぶしかった。春だっていうのに、もう麦わら帽子が欲しいくらいの日差しの強さだ。うさぎは、まぶしそうな目をして空を見た。

「色が違うよ、街の空と」

「そうさ。だから、ここへ来たんだよ」

寮美千子『星鬼』

問一——の部分について、なぜ「みんな」は「ぼく」を「透明」なものとして接するのですか。説明しなさい。

問二——の部分について、その時のうさぎの顔が「すごくきれいだった」のはなぜでしょうか。なぜ「ぼく」にそのように見えたのかを考えて、二五〇字以内で答えなさい。

問五	問四	問三		問二	問一
		(2)	(1)		ア
					イ
					ウ
					エ

[illegible]